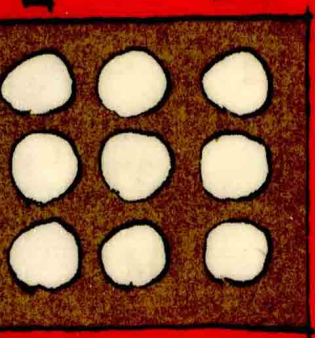


自家製

文章草讀本

井上乙巳



自家製文章讀本

井上ひさし



| | | | | | | | | |
|--|----------------------------------|----------|----------|-------------|--|---------------|--------------|--------|
| 自家製文章読本 <small>じかせいぶんししょうとくほん</small> | 昭和五十九年四月五日 発行 昭和五十九年五月二十五日 四刷 | 著者 井上ひさし | 発行者 佐藤亮一 | 発行所 株式会社新潮社 | 郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務室(三六)五一一一 編集室(三六)五四一一 振替東京四一八〇八 | 印刷所 大日本印刷株式会社 | 製本所 加藤製本株式会社 | 定価九二〇円 |
|--|----------------------------------|----------|----------|-------------|--|---------------|--------------|--------|

© Hisashi Inoue 1984 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-10-302314-7 C0081

目次

| | |
|----------------------------|-----|
| 滑稽な冒険へ旅立つ前に | 7 |
| ことばの列 | 18 |
| 話すように書くな | 37 |
| 透明文章の怪 | 47 |
| 文問 <small>ぶんかん</small> の問題 | 74 |
| オノマトペ | 92 |
| 踊る文章 | 110 |

冒頭と結尾 129

和臭と漢臭 156

「和臭と漢臭」拾遺 165

文章の燃料 175

形式と流儀 193

読むことと書くこと 213

装幀 安野光雅

自家製 文章読本

滑稽な冒険へ旅立つ前に

『文章読本』を編むことは、いまやほとんど不可能事に近い。……冒頭にこう掲げると、たちまち「奇を衒うな」という叱声を浴びることになるにちがいない。たしかにわたしは奇を好む質だが、この悲鳴は本心から発せられている。『文章読本』を試みることは、真実、滑稽な冒険なのだ。理由は大小二つあって、一つは個人的な事情による。すなわち浅学非才の筆者には、その実力と資格に欠けるのである。たいした実績もなく、また蓄えもないのに、かかる大冒険をうかうかと引き受けた浅はかさ、われながら空怖しく、そのせいで震えている。

『文章読本』を試みるのは滑稽な冒険になるだろうという予測を支える第二の理由、こちらのほうが重要なのだが、それは近ごろの文学の形勢にある。もともと正確には、文学を取り巻く世間の在り方にある。だが、急いでではない。その前に諸家の説に耳を傾けてみよう。

話し言葉と書き言葉の無邪気な混同。大文豪にしてはどうかと思われる、陳腐の上なく、かつ判ったようで判らない比喻など、谷崎潤一郎の文章読本の瑕を数えればきりが無い。谷崎読本には食物や酒についての比喻がすくぶる多いが、それはそれとしてそれらの瑕が読み進むにつれてやがて笑窪にかわってしまうのは不思議である。これこそ文章の力というものだろうか。そして結句の、《此の讀本は始めから終りまで、殆ど含蓄の一事を説いてゐるのだと申し

てもよいのであります。》（「合著について」）に至つて狐につままれたような気分になつてしまふ。むろんその気分は悪いものではなく、いつてみれば読者は、文章術の要諦は授けられなかつたかわりに、別の上等な読物、たとえば『食通読本』のようなものを贈られたのであるが、この谷崎読本からは、

文章に對する感覺を研くのには、昔の寺子屋式の教授法が最も適してゐる（略）。講釋をせずに、繰り返し／＼音讀せしめる、（略）古來の明文と云はれるものを、出來るだけ多く、さうして繰り返し讀むことです。（略）さうするうちには次第に感覺が研かれて來て、名文の味ひが會得されるやうになり、それと同時に、意味の不明であつた個所も、夜がほの／＼と明けるやうに釋然として來る。即ち感覺に導かれて、文章道の奧義に悟入するのであります。

（「感覺を研くこと」）

という個所を引かせていただく。のちに展開する理屈の、この引用は手がかりのひとつになるはずである。紙幅の都合で川端康成を飛び三島に至つてその文章読本の要旨をまとめれば、「氣品と格調こそ文章の最後の理想である。そしてその氣品と格調は古典的教養によつて培われる」となるだろう。三島読本で愉快なのは、創作では抑えられていたこの小説家の茶目ッ氣が大いに發揮されている巻末附録の「質疑應答」である。たとえば「小説第一の美人は誰ですか」という問いに、

「文章における小説第一の美人とは、もしあなたが小説を書いて『彼女は古今東西の小説のなかに現れた女性のなかで第一の美人であつた』と書けば、それが第一の美人になるのです。言

語のこの抽象的性質が、小説中の美人の本質を規定する。歴史が史上最高の美女というときはなんらかの裏付けがなければならぬが、小説はそれ自体で成り立っている小宇宙だからなんの裏付けもいらぬ。小説第一の美女はいつでも任意の場所に出現する。劇や映画では女優という具体物が出るから、やはり小説のようにゆかない」

と答えている。この答は正しい上に、機智にも富んでいる。あとの理屈のために三島読本から次の一節を引用させていたたく。

漢文の文章の影響からくる極度に壓縮された、極度に簡潔な表現、あるひはまた俳句の傳統からくる尖鋭な情緒の裁斷、かういふ傳統がやはり現代文學のなかにも生きてゐて、われわれの美しい文章といふもののなかには、いかにも現代的に見えながら、なほ漢語的簡潔さや、俳句的な密度をもつたものが少くありません。結局、文章を味はふといふことは、長い言葉の傳統を味はふといふことになるのであります。さうして文章のあらゆる現代的な未來的な相貌のなかにも、言葉の深い由緒を採すことになるのであります。それによつて文章を味はふことは、われわれの歴史を認識することになるのであります。

(「文章のさまざま」)

中村真一郎の文章読本には卓見がちりばめられている。なかでも、鷗外の、漱石の、そして露伴のあの文体がどのようにして成つたかを、「文章の土台、苗床」という鍵言葉を駆使して大胆かつ細心に追跡してゆく件は圧巻である。中村読本の前半の主題は、「近代口語文の完成は、考へる文章と感ずる文章との統一である。したがつてその完成の有資格者は学者であると

同時に作家でもある人が適當であつた。そしてその实例が鷗外漱石露伴であつた」というところにある。そこでこれら三大家が、どの部分で伝統とつながろうとし、どの部分で古典への連想を断ち切ろうとしたかが明らかにされているが、のちのわたしの理屈に引きつけていえば、たとえば自然主義文学者の如く、伝統や古典へいかにはげしい拒絶の態度をとろうと、それでもやはり、いや、それだからこそかえつて、いっそう強く伝統や古典を意識していたといつてよい。仮想敵国への拒絶の姿勢は、その実、当該国への関心によって支えられているのである。

丸谷才一の文章読本は掛け値なしの名人芸だ。たとえば文体論とレトリック論を、大岡昇平の『野火』一作にしぼつて展開してゆく第九章などは、おそろしいほどの力業である。なによりも文章が立派で、中村読本に凭れかかつていえば、考える文章と感ずる文章との美事な統一がここにはある。奇体なことに、丸谷読本以外の文章読本の文章は、それぞれ書き手のものとしては上等とは言い難い。金のために書かれた、あるいは啓蒙読物として書かれたなどの、執筆時の事情もあるだろうが、日頃の文章より数段落ちるという印象がある。ところが丸谷読本はこの奇妙なならわしを打ち破つたのである。とくにその上質の諧謔はわたしたちをうっとりさせるとさせる。

しかし文章上達の秘訣はただ一つしかない。あるいは、そのただ一つが要諦であつて、他はことごとく枝葉末節にすぎない。当然わたしはまづ肝心の一事について論じようとする。

ともものものしく構へたあとで、秘訣とは何のことはない名文を読むことだと言へば、人は拍子抜けして、馬鹿にするなとつぶやくかもしれぬ。そんな迂遠な話では困ると嘆く

向きもあらう。だがわたしは大まじめだし、迂遠であらうとなからうと、とにかくこれしか道はないのである。観念するしかない。作文の極意はただ名文に接し名文に親しむこと、それに尽きる。(略)われわれは常に文章を伝統によつて学ぶからである。人は好んで才能を云々したがるけれど、個人の才能とは実のところ伝統を学ぶ学び方の才能にほかならない。

(第二章 名文を読め)

これまでの引用個所を、諸家の真意を踏みにじるといふ暴挙をあえておかしながら、我流にまとめると、次のようになるだろうか。

ヒトが言語を獲得した瞬間にはじまり、過去から現在を経て未来へと繋つて行く途方もなく長い連鎖こそ伝統であり、わたしたちはそのうちの一環である。ひとつひとつの言葉の由緒をたずねて吟味し、名文をよく読み、それらの言葉の絶妙な組合せ法や美しい音の響き具合を会得し、その上でなんとかまじいな文章を綴ろうと努力するとき、わたしたちは奇蹟をおこすことができるかもしれない。その奇蹟こそは新たな名文である。新たな名文は古典のなかに迎えられ、次代へと引きつがれてゆくだろう。すなわち、いま、よい文章を綴る作業は、過去と未来をしっかりと結び合わせる仕事にほかならない。もっといえば文章を綴ることで、わたしたちは歴史に参加するのである、と。

たしかにヒトは言葉を書きつけることで、この宇宙での最大の王「時間」と対抗してきた。

芭蕉は五十年で時間に殺されたが、しかしたとえば、周囲がやかましいほど静けさはいやますという一瞬の心象を十七音にまとめ、それを書きとめることで、時間に一矢むくいた。閑さや岩にしみ入蟬いづれの声はまだ生きてゐる。時間は今のところ芭蕉を抹殺できないでゐるのだ。芭蕉

はほんの一例であつて、文学史は、というよりこれまでヒトが書き記したもののすべて、すなわちヒトの記憶一切はみな同じ構造をもつていると思われる。書庫から鷗外漱石露伴を取り出し彼等の文章にふれるとき、わたしたちはこの三大家が文章に姿をかえてちゃんと生きていることを確認する。その瞬間に時間は折り畳まれ、ヒトの膝下にひざまずくのである。せいぜい生きて七、八十年の、ちっぽけな生物ヒトが永遠でありたいと祈願して創り出したものが、言語であり、その言語を整理して書きのこした文章であつた。わたしたちの読書行為の底には「過去とつながりたい」という願いがある。そして文章を綴ろうとするときには「未来へつながりたい」という想いがあるのである。

だが、奇怪なことが起りはじめているのもたしかである。かなわぬまでも時間と対抗しようという、いかにも人間らしい気組みが世の中から急速に失われて行きつつあるらしい。時間とたたかう前に、やすやすと屈服して、暴君「時間」のなすがままにまかせているようなところがある。たとえばテレビは、わたしが放送台本作者だつたころ、ということは何数年ばかり前から、一回性というものを重んじはじめた。ハプニングと恰好よく命名されたその手法は、〈視聴率はどかんと稼ぐが、放映そのものは一回こっきり、二度とは放映しない。それがテレビというものだ〉という思想で支えられている。書物に引きつけていえば〈再読に耐える名作や名文なんていらぬよ。読み捨てられ、忘れ去られてかまわない〉というわけだ。一瞬大いに当って、ある時間すぎれば消えて失くなつてしまつた方がいいのである。時間を超えたい、いいものを作りたいなどというところ「小狡いエリート趣味」「嘘っぽい」「根暗、やーね」と一笑に付されてしまう。というところはテレビと小説とを混同していると腹を立てるかもしれない。しかしそうではないので、これらの風潮の底の底には、大量生産↓大宣伝↓大量購買↓大量破

棄という、この時代の枠組がある。再読、三読に耐えるものなどあっては、あとに控えている小説が捌けないから、かえって困るのだ。こうした時代での悲劇は、年に数冊あらわれる名作『古典候補作が「ベストセラーのうちの一冊」と安直にレットルを貼られ、数カ月店頭を賑わせて、それからひっそりと消えてしまうことである。こんな時代でなければ、たとえ細々とあっても長々と売れることであらうに。

言葉も同様の扱いを受けており、その由緒をたどり吟味するどころではなく、一回こっきり
の使い捨てだ。なにしろ婦人雑誌が「冬のお股のお手入れは……」などと書くぐらいである。「お肌のお手入れ」を誤記したのだ。親しくしている中学教師は、この二期期の漢字書取りの試験に、「処女公開」(航海)、「祖国」(祖)、「巢まい」(住まい)と書いた生徒がいたと教えてくれた。「おまえは洒落でこんなことを書いたのか」と問うとその生徒は「とんでもない」と答えたそうだ。洒落でなかったとしたら、わたしたちはすでに漢字の伝統とも切れかかっているのかもしれない。こういった事情をもっとも雄弁に物語っているのは、近ごろのパロディブームとか称するものだろう。パロディが成立するには必ず原作の伝統がなければならぬ。ところが今のパロディの原作は殆どが、標語とコマーシャルである。すなわち時間をさかのぼることとせず、同時代のものをなぞり、もじっているだけなのだ。ここでも過去と切れている。したがって未来なぞあるはずはない。一回性を超えるために発明された人類の全遺産が、一回性がいいのだとする利根的な場当たり主義によって危機に瀕しているのである。

下駄は、その一足一足を丁寧に眺めれば、いろいろさまざまである。どの下駄も、ほかの下駄とは大なり小なりちがっている。しかしわたしたちはへ木をくりぬいて歯を作りつけ、花緒をすげたはきものゝを下駄と呼ぶ。たとえそれが摺り減っていても、また割れていても、ある

いは花緒が切れていても、とにかく下駄のありとあらゆる在り方にたいして、わたしたちは下駄という同じ名をあてはめる。京の五条の橋の上で牛若と弁慶がはいていたのも下駄なら、「たけくらべ」の藤本信如が雨の中で、近くで美登利が見ているとも知らずに一所懸命に花緒をすげていたのも下駄である。わたしの下駄箱の中にあるのも、もちろん下駄である。こうしてみると、言語そのものが「永遠を目ざす継続」という考えを内に含んでいることがよくわかる。このことは、わが子の名前をつけようとしている両親の気持になればすぐにも理解できるだろう。どの親たちも「この子に幸せよ、永遠に」と祈りながら命名するのである。つまり言語というものは、地球や人間やモノがほとんど永久に存在するという条件があつてはじめて、うまくはたらくのである。ところが現代は言語にとつてはまことに不幸な時代で、たとえば名古屋大学教授の豊田利幸（物理学）は次のように警告している。

新春早々、不吉な予感を語ることは適當でないかもしれない。しかし、これは火山の噴火とか、大地震のような自然現象の兆候についてはない。人間が自分でつくった核兵器によつて、人類全体を破滅させる準備を精力的に進めてきた結果、人類最後の運命の時刻が寸前に迫っている。これは誇張ではない。

さる十二月二十二日、科学者の国際的な雑誌「ビュレティン・オブ・ジ・アトミック・サイエンティスト」は、この一月号で「審判の日の時計」の針を、真夜中三分前に進め、異例の黒地の表紙に白抜きで「今こそ人類は、何ごとかをなさねばならぬ。残された時間は三分しかない」と印刷し、これを東京、ワシントン、ストックホルム、ロンドンで同時発表した。